

昭和十七年八月の、たしか五日であったと思います。売店で買物をしての帰途、事務分館のそばで、私は三浦（短歌会の中心的な存在となっていた人で私はときどき小説をもって聞いてもらったりしていた）に呼びとめられ、その晩来るようにと云われたのです。何の用かと思いましたが、彼はすぐ去ってしまったのでかく私はその夜彼の家を訪れました。とどうでしょう。それは意外にも結婚話であったのです。きき違えたのではないかとおどろいたのも無理ありません。しかも結婚の意思の有無を彼に確かめられたのち、手渡された封書の主が南村良子（みなみむら・りょうこ）であったのですから、私は二度びっくりしてしまった。南村良子、は恩賜寮（皇太后陛下の御下賜金で建てられた処女舎で四十人あまりの娘が住んでいました）のAクラスに属する女であったからです。だから彼の家を出た私はまるで秘密の宝を持ってでもいるかのようにポケットの奥深くしまいこんだ封書をおさえたまま部屋にかけ戻ったのでした。そしてすぐ開封したのです。

「妹もあと二、三年で結婚適齢期になります。それでこちらの様子を何度も面会に来てくわしく知っている父が私に結婚するようにと云って来たのでございます。でもそれは姉を妹より先に縁づけようといった常法的な考え方から出たものではございません。家名に傷のつくことを、そして妹の結婚の障害になることをおそれることでございます。父は結婚して男の籍に入籍することで私の籍をなるべく早く抜いて戸籍抄本を送ってくれたいのでございます。そうすれば私の病気の秘密を守ることができるからでございます。私は貴方様の創作を機関誌でよませて頂き深い感動を覚えました。貴方様の真実が感じられたからでございます。結婚など考えないで一生一人で島の土になるつもりでこの島に参りましたのでございますが、さきにのべましたような理由でどうしても籍を抜かなければならぬ結核の決意をしたのでございます。」

読み終わった私は胸をつかれて涙ぐんでしまいました。青年の感傷であったかも知れませんが、いや感傷とのみはいえないのです。幾十人も男性の対象となっていたにちがいない彼女が、私を、しかも真剣に書いた作品を通じて私を選んでくれたという真情にうたれたからにちがいません。そして私はそのとき結婚をしようと決断していたのです。私は早速入籍の手続きがとれるかどうか一週間以内に知らせてくれと父に手紙を書きました。もちろん籍のことは父に問い合わせるからという意味のことを南村良子宛に書いたのはいうまでもありません。

（中略 その後、二人は結婚する運びとなりました）

式は中野の挨拶によつてはじめられました。その次に執行部、その日の当直部長の祝辞、友人代表としての宮島の祝辞がつづいて述べられたので、私はその一言一句に感激し、感謝しつつ、良子との生活をよりよく築き上げねばならないと決意していました。ところが二次会になって人々が喰べたり歌ったり話し合ったりするようになって私の心は逆に沈んでいったのです。他界した母のこと、故郷の父や妹のこと、家からぬいた籍のこと、そして一生の重大事であるこの結婚の席上に双方の両親の一人も列席していないということ、などが走馬燈のように浮んでは消えていたからです。私はそつと良子の方に視線を投げかけました。彼女は固くなって膝の上において手の指先をじつとみていたのです。そんな良子の白いうなじにかかったほつれ毛が思ひなしかふるえていました。「体をらくにしてね」きつと良子も私と同じようなことを思っているにちがいないと感じた私は低い声でささやきました。しかし彼女はだまって一寸頷いただけでした。酒が禁じられていたので茶が女たちによつて給仕されましたが結構座がはずんで人びとの帰ったのが九時過ぎ、あとかたづけをすますと十時過ぎになりました。それから良子は利根子と帰っていったのです。

普通一般の結婚式なら式後直ちに新婚旅行に出るのが常識なのですが、私にはそれがあてはまらなかったのです。まだ断種の律法を身にうけていなかったからです。

潮のひいたような寂莫の中で 1 人寝の私は良子を慕いながらワゼクトミー（断種手術）について考えこんでいました。何故当局はワゼクトミーを強制するのか、子供を産んではいけないからだ、何故いけないのか、分っているじゃないか、医学的に伝染の可能性が考えられるし、経済的には患者が産んだ子を養う予算がないし、倫理的にも子供を産むことはその子供の将来に暗い影を投げかけるのではないか、もし産れてもその子に対する責任が持てるかい、考えれば考えるほど手術を拒否する理由がなくなってくるのを感じて私は焦ったのです。しかし拒否の理由を求めようとしても結局らいという壁にぶつかってしまふのでした。